＜前回＞オリエンテーション＋導入

Ａ．テーマ：「新約聖書からキリスト教古代へ」

Ｄ．確認事項

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火３・木３）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

０．オリエンテーション	4/12
１．新約聖書と新約聖書学	4/19
２．イエスと「神の国」運動	4/26
３．病の癒やし・譬え・共同生活	5/10
４．イエスの宗教運動から初期キリスト教へ	5/17
５．初期キリスト教の多様性とパウロ	5/24
６．パウロの異邦人伝道	5/31
７．パウロ以降のキリスト教	6/7
８．ユダヤ教とローマ帝国	6/14
９．古代キリスト教１：ヘレニズム・ローマ世界、使徒教父	6/21
10．古代キリスト教２：キリスト教迫害と弁証家たち	6/28
11．古代キリスト教３：アレキサンドリア学派とオリゲネス	7/5
12．古代キリスト教４：公認・国教会と正統教会	7/12
13．古代キリスト教５：アウグスティヌス	7/19
14．古代キリスト教６：ゲルマン民族移動から中世へ	（7/26）
15．フィードバック	

＜導入＞

Ａ．「キリスト教思想史研究」に向けて（「キリスト教学講義」より）

１．宗教現象を見る二つの視点

1)外から、客観的データの分析に基づいて　→　現代宗教学

2)内から、内から発信され表現されたものを手掛かりに内面へと迫る

２．思想とは何か？　なぜ思想なのか！

生き方を決めているポリシーの問題（思考方法、発想法、見方）としての思想。

３．思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。

→　キリスト教思想は聖書から始まる。

４．思想の歴史性　→　思想史的アプローチの必要性

Ｂ．書評：

５．ハンス・キュンク著（片山寛訳）『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルト』新教出版社、2014 年。

・・・

本書が描くキリスト教思想史のキーワードは、パラダイム（思想史の一つの時代を前後から区別しその時代を特徴付け、時代の思想家たちに共有された思考様式・問題系）ですが、キュンクは、キリスト教史をパラダイムの交代・転換のプロセスとして叙述しています。それは、キリスト教思想を時代状況との相関において捉える試みであり、そのパラダイムを生み出し体現した思想家が、先に挙げた七人だったのです。つまり、パウロは新約聖書

的キリスト教的パラダイムに、オリゲネスは古代キリスト教的パラダイムに、アウグスティヌスは西方キリスト教的パラダイムに、トマス・アクィナスは中世的スコラ的パラダイムに、ルターは宗教改革的パラダイムに、シュライエルマッハーは近代キリスト教的パラダイムに､そしてバルトはポスト近代的パラダイムに対応する人物として描かれています。
・・・

C．新約聖書から古代キリスト教へ

７．初期キリスト教思想の中心テーマとしての「パウロの十字架・復活理解」「贖罪」
・イザヤ書の「苦難の僕」
８．福音書における「クリスマス物語」
・マタイとルカ
・福音書の成立背景
　ユダヤ民族・ユダヤ教の危機とエルサレム教会の消滅　→　ユダヤ教の立て直し
　　→　ユダヤ教イエス派の排除　→　キリスト教の自立
・「牧会書簡」（テモテ一・二、テトス）：二世紀前半
９．クリスマス物語の位置、キリスト理解における受肉論の意義は後の展開。
O・クルマン『クリスマスの起源』教文館。
「紀元後三世紀までのキリスト教徒は、一二月二五日をクリスマスとして祝っていなかった。キリスト教徒は、四世紀の初頭まで、後にキリスト教会の重要な祝日となるこの日に、集まって礼拝を献げることもなく、キリスト教の誕生を話題にするなく、他の日と何の変わりもなく静かに過ごしていた。」(7)
10.「キリスト教神学の中心は元来、イエスの十字架と復活であった。それはパウロにおいても福音書記者マルコにおいてもそうだったし、マタイやルカにおいてもまたそうだったし、ヨハネにおいてさせもまだそうだった。それがヘレニズムの影響の下ではもはや明瞭ではなくなっているのである。そうだ、中心は今やむしろ「受肉」である。」（キュンク、91)、「キリスト論におけるパラダイム転換」(92)

１．　新約聖書と新約聖書学

（1）近代的知のモデルとしての自然主義

１．西洋の「宗教と科学」関係論は、18 世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解、そして聖書研究も、この変動に規定されている。
　啓蒙主義→実証主義的科学
　　村上陽一郎の聖俗革命
　　村上陽一郎の「聖俗革命」:「神―世界―人間」→「世界―人間」
２.「近代科学」の自律化：一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）の誕生。近代的知のモデル。
　小林道夫：仮説→実験による検証・修正
３.代表例としてのラプラス・ラプラスの悪魔（ラプラス『確率の哲学的試論』、岩波文庫）
４．注意点：科学の分野における相違あるいは時差
５．近接的な作用因による因果律と自然
　　→　機械論的自然　cf. 錬金術的自然
　　日常的経験とのずれ（デカルト）
　　↓

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

（２）自然主義と宗教、争点は何か

６．科学と宗教との対立（近代的知・自律と伝統的権威・他律）とは、双方に原因がある。

７．そもそも、奇跡とは何か。

パネンベルクの奇跡論

759.1/

the concept of miracle has become one of the more intricate problems, because miracles are said to involve a violation of the laws of nature, as David Hume asserted in the section on miracles in his *Enquiry Concerning Human Understanding* (1748).

The concept of miracle as a violation of natural law subverts the very concept of law and in effect exposes the futility of the assertion of miracles.

760.1/

This was not the meaning of the concept of miracle in Christian theology, however. In the biblical writings, the word *miracle* refers to extraordinary events that function as "signs" of God's sovereign power. .... " signs and wonders"(Daniel 6:27; John 4:48)

Augustine said, "Whatever is unusual, is a miracle"(*quae sunt rara, ipsa sunt mira; De civ. Dei* 21,8,3). Explicitly he emphasized that events of that type do not occur contrary to the nature of things. To us they may appear contrary, because of our limited knowledge of the "course of nature." But God's point of view is different,.....

・・・

762.2/

The concept of miracle in the Augustinian sense of the term, then, does not involve any opposition to the order of nature described in terms of natural law. It only requires us to admit that we do not know everything about how the processes of nature work. .... In any event, the awareness of the limitations of our knowledge may keep us from denying on principle the possibility of natural events, even if they are extremely unusual.

that (to deny their possibility on principle) would be a form of dogmatism and not consonant with the empirical attitude of science.

８．John Locke: according to the reason / above / contrary to

knowledge / faith　信仰と知との関係、信仰にとっての懐疑の意味(Paul Tillich, *Dynamics of Faith*)　懐疑は信仰の構成要素である。

９．ヒック：自然主義とは何か。→近代の様々な世界観が共有する立場。

自然主義と宗教は論理的には相互に論駁不可能な二つの世界の見方。

→　宗教的見方にもそれ固有の合理性が認められる。合理性の複数性。

「まずは自然主義の世界観を頭に入れておく必要がある。これは近代の西欧思想の中心にあるもので、仮想の実在というものの可能性を一切認めない考えである。自然主義の世界観は有力な科学者から提出された山のような注釈によって、いまや疑う余地のない仮説と見なされている。」(3)

「根本的な信仰箇条」「科学内部の、つまりは一般社会内部での優勢な無批判的仮説ないしは根底的なパラダイム」(4)

＜参考文献＞

１．小林道夫『科学哲学』産業図書。
２．村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社、『科学・哲学・信仰』第三文明社。
３．ブライアン・イーズリー『魔女狩り　対　新哲学』平凡社。
４．ヒック『人はいかにして神と出会うか　宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。
５．パネンベルク（Wolfhart Pannenberg）
"The Concept of Miracle," in: *Zygon*, vol.37.no.3（September 2002）by the Joint Publication Board of Zygon, pp.759-762.
６．ヒューム『『奇蹟論・迷信論・自殺論 ―ヒューム宗教論集 3』法政大学出版局。

（３）近代的知と歴史主義

１．自然主義と歴史主義
近代的知の二つの動向（因果律の二つのタイプ）
作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。
→　自然科学／精神科学、説明／理解

２．「近代」と人間的現実の歴史化
現実は永遠不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。
↓
近代歴史学、歴史的視点

「「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は、メッサニーが言う「自然」からの「自由」という性格をもっていることに、われわれは注目せねばならない。つまりそれは「自然」から「自由」へという変化、「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程でもある。」（大木、上、47）
「四つの相における近代化」「①工業化、②都市化、③民主化、④情報化」（55-60）、「真理から情報へ、これは、真理の歴史化と言ってよい。真理は永遠ではない。」（58）
「近代化の深層構造」「①非魔術化・合理化」「②自由化としての近代化」（60-63）、「「コスモス」から「歴史」へという《歴史化》が、われわれの歴史神学の座となる。」（62）

３．「歴史主義」の多義性あるいは混乱
歴史主義という用語は、様々な視点から様々な意味を賦与させて使用されている。特に、ポパーとのほかの論者との相違。

「歴史主義」「その悪しき側面から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されねばならない」、「しかし、この歴史主義に対して、自然主義が同様に原理的かつ包括的な仕方で対立している」（トレルチ、諸問題・上、158）、「自然主義は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則化の連関として、またそのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されなければならない」、「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世にも知られていないものであった」（159）、「近代的思惟一般が持っている二つの本質的動機」（164）。

４．存在レベルにおける歴史・歴史化（存在論的概念）
・人間存在の歴史性
・聖書的な歴史的思惟（聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味）
聖書的人格主義とギリシャ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。
・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

５．知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関（文脈）の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。

相対性の意識＝歴史相対主義→ニヒリズム

「この時代の激動は、倫理学の崩壊をももたらした」（大木、1)、「相対主義の克服とは、相対主義が文化ニヒリズムへと転落する道とは逆の方向を模索することであり、崩落に身を委ねるのではなく上昇の意志をもつことである」、「今日の知的課題は、倫理学の建設である」、「相対的状況を十分知りながら、なお倫理学が倫理学として必然的に求めるべき普遍的な当為を探究する一つの企てがなされる。」(2)

「自然主義は無制限に、あらゆる生活のものずごい自然主義化と荒涼化へと導き、歴史主義はあの相対主義的懐疑に導く」、「歴史的なものの認識可能性と意味とに対する相対主義的な価値的懐疑であり疑惑である」、「これら悪い副次的な意味」、「歴史的素材を使いこなす文化総合へと向かう勇気をふるい起こす歴史哲学を求めている。」（トレルチ、165）

＜参考文献＞

１．トレルチ『歴史主義とその諸問題　上中下』（トレルチ著作集４～６）、ヨルダン社。
『歴史主義とその克服』理想社。
２．Ｃ・アントーニ『歴史主義』創文社。
３．Ｆ．マイネッケ『歴史主義の成立　上下』筑摩書房。
４．Ｋ．ホイシー『歴史主義の危機』イザラ書房。
５．Ｋ・ポパー『歴史主義の貧困』中央公論社。
６．カール・マンハイム『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣。
７．田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院。
８．コリンウッド『歴史哲学の本質と目的』未来社。
９．リクール『歴史と物語　ⅠⅡⅢ』新曜社。
10．E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書。
11．ゲオルク　Ｇ．イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
12．大木英夫『新しい共同体の倫理学　基礎論　上下』教文館。
13．大林浩『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局。
14．その他
カール・レーヴィット『歴史の意味』未来社。
ニスベット『歴史とメタファー　社会変化の諸相』紀伊國屋書店。
アルフレート・シュミット『歴史と構造　マルクス主義歴史認識論の諸問題』
法政大学出版局。
ポール・ヴェーヌ『差異の目録　新しい歴史のために』法政大学出版局。
ドミニク・ラカプラ『歴史と批評』平凡社。
アーサー・Ｃ・ダント『物語としての歴史　歴史の分析哲学』国文社。

（4）近代聖書学とその諸前提

1．知・人間的現実の地平としての歴史（歴史化）→歴史主義・歴史的思惟

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物（歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される）である。

2．近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想（研究）＝近代聖書学の成立

近代世界（近代的な日常性）へのキリスト教の適応という歴史的動向において。

・18 世紀「新しい解釈学をめぐる対決」（シュトゥールマッハー）

「正統主義はただ、十八世紀における対決を決定的な仕方で規定した、啓蒙された合理主義あるいはピエティズムという二つの運動と結び付けている所でのみの、生き延びることができた」（180）、「対決の結果は、聖書の歴史的・批判的研究をもはや長いこと回避せず、遂行して、まさにそのことによって聖書の道を指し示す声を、新たに確かなものにするということに対して備えることである。この結果に啓蒙主義とピエティズムは等しく与った。プロテスタントが自分の土台の力を信頼して、この対決を回避しなかったことは、全体としてプロテスタントが誇ってよいことである。」（181）

先駆者：ルターとカルヴァンという出発点、フラーキウス、ソツィニ派、グロティウス

トゥレティニ（1671-1737）、ヴェトシュタイン（1693-1754）、ゼムラー（1725-1791）

ベンゲル（1687-1752）

「十八世紀の新しい解釈学をめぐる論は、革新論の事実上の優勢と、革新論者と敬虔派とが共に肯定し実践した聖書の歴史的・批判的考察でもって閉じられる」（206）、「純粋に学問的なテキスト解釈が、いかに教会に役立ちもし、害を与えもするかは、テルトゥリアヌス以来すでに明白である。」（207）

・19 世紀「シュライアマハーの解釈学」「調停」

・シュトラウス（1808-1974）『イエスの生涯』（1835/36）

「イエスに関する聖書の伝承にあてはめた神話概念」は「無意識に作られる伝説という形で形成されたものと定義している」（219）

・バウル（1792-1860）とテュービンゲン学派

「シュトラウスにおいてすべての人にとって明白な仕方で始まる、批判的な歴史観とキリスト論的な教義との食い違いを、バウルはその研究によって解釈学的にも実際的にも克服した。正にこのことによって彼は後世に対して、歴史的・批判的神学はどうあるべきか、またいかに作業をする必要があるかということに対して、一つの尺度を打ち立てた。」（224）

「釈義が歴史的・批判的神学と理解されることを欲する限り、今日バウルとシュライエルマッハーより後退することはできないし、また許されもしない。」（224）

3．近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

・「十八世紀のいずれかの時点で、ドイツの大学、とりわけゲッティンゲン大学において、今までの単なる考証学から新しい科学的な方向、つまり、証拠となる史料の批判的検討と、出来事の成行を物語風に再構成することとを結合させるような方向に向かっての歴史学科の移行が始まった。この移行は、体系的でアカデミックな専門的研究としての歴史学の登場と密接にからみ合っていた。こうした変化と平行して、十九世紀に歴史研究が制度化されて専門的職業となってゆくにつれて、歴史家にとって一つのパラダイムが出現してきた。そして、このパラダイムが、ごく最近まで大学において執筆される歴史叙述に影響を及ぼし続けてきたのである。」（イッガース、13）

・「出来事の相互連関を把握できるような歴史学の手法を発展させようとした」(16)、「歴史学的＝文献学的方法と呼ばれることになるこの方法を使用した一つのモデル」(20)、「人間を取り扱う諸々の専門研究分野にとって解釈学的で歴史学的なアプローチの仕方が価値をもっていることを強調した」(21)。
・「「科学的」学派は、史料の批判的検討を強調したにもかかわらず、歴史研究のイデオロギー的機能を弱めることに貢献しなかったばかりか、むしろ歴史研究が内政や外交上の目的のためにますます多く利用されるのを促進さえしたということなのである」(26)、「歴史主義の解釈学的な方式は、社会主義批判にうってつけであった」(27)、「国家的な公文書から読みとれるような国民国家の歴史」(40)。

↓

民衆史、心性史（アナール学派）

土肥昭夫『日本ポロテスタント・キリスト教史論』教文館、1987 年。

４．トレルチ

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的事象間に生ずる連関がそれである。」(10)

「蓋然性の判断」(10)

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)

「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)

５．パネンベルク

・「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

＜参考文献＞

１．『聖書講座』（第一、二、三、四巻。特に今回の講義に関連しては、第一、四巻）
日本基督教団出版局、1965 年。
２．P.シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
３．出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史　新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986 年。
４．ゲオルグ　G.　イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
５．トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集２』

ヨルダン社。
6．パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。

（5）近代聖書学の方法と帰結

1．歴史的批判的方法：文献学＋歴史学→近代聖書学のパラダイム
2．伝承史：イエス→→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集
・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判：文学様式と生活の座との対応）
・編集者の意図・神学の解明（編集批判）
3．様式批判・編集批判から文学社会学（テキストと社会との相関関係・相互連関）へ。
そして、新しい新約研究の動向＝方法論の拡張・総合化（歴史的批判的方法を超えて）